

# 広島的女性と外国人

水越紀子

はじめに

広島県の外国人登録者数は、一九七四年一七、二九七人、一九八四年一九、二〇五人、一九九四年二六、七二七人と推移し年々上昇している。国別で最も多いのは、韓国又は朝鮮の一五、三三八人で、ブラジル 三、五〇一人、中国 二、八三八人、フィリピン 一、九三三人の順となっている（一九九四年二月現在）<sup>(1)</sup>。イリーガルの滞在者を含めるとその数はもっと多いと予想される。

また、一九九四年一月～十二月の一年間に広島を訪れた観光客は、広島湾地域に限っただけでも 二六四、一六九人である<sup>(2)</sup>。

外国人との接触。それは今、日常的である。日本人と

結婚し定住する外国人も増えている。電車や近隣のスーパーマーケットなどで生活者としての外国人と接することも多い。

広島市は「国際平和文化都市」を掲げる。国際交流活動があらゆる場に氾濫する。国際会議場や国際センターなどは、国際的な活動を行うスペースである。外国人の出入りの多い華やかな「国際的」な場所としてのイメージを定着させた。しかし「国際」は言葉と場所に於いてあいまいなまま浮遊している。

地域社会で生活している外国人から「国際とは何ですか」と問われることがしばしばある。彼らは、広島目にする「国際」という文字を彼らなりにイメージする。

それを、自分たちを快く受け入れる一つのシンボルと考える。しかし、実際に生活し始めてみるとその期待は裏

切られる。生活圏で関わる日本人から受ける行為は、彼らのイメージした国際とは程遠いものである。

広島で語られる「国際」の中身。それがここでのテーマである。広島で生活する外国人が、日本人と関わる生活圏で何を感じているのか。具体的に日本人からどういう関係性を強いられるのか。そして彼らと対している日本人の意識とはどういう意識なのか。

その関心に沿って、国際交流ボランティア活動をする女性たちの聞き取りを行った。今後さらに増加するであろう外国人と、どのように共生していけばいいのか。それを考えるひとつの場を提供したい。

### 一、ボランティア活動をする女性たち

広島で日ごろ外国人と接触している女性を対象に、一九九五年八月から一九九六年四月に行った聞き取り調査は、対象者十二人の全員がボランティア活動経験者である。県や市など行政機関のボランティアに参加する、行政の下部組織のボランティア・グループに参加する、また公民館の国際交流事業に参加するなどさまざまな形でのボランティア経験者である。長期の人は一二年、短い

人で二年、殆どが数年の経験者である。

財団法人ひろしま国際センターは「国際交流なんでもボランティア運営事業」でボランティアの登録制度を実施している。登録分野はホストファミリー・通訳・翻訳・文化紹介・事業協力などで全登録者は三、三七五人である<sup>(3)</sup>。

また広島市国際交流協会は「ボランティアの登録・幹旋、育成事業」で登録制度を実施している。登録分野は語学・文化紹介・ホームステイ・ホームビジット・国際交流活動など。登録者は八〇二人である<sup>(4)</sup>。

上記の機関に団体登録しているグループも多い。語学習得グループやホームステイを引き受ける団体などである。実績を積み県や市の補助金で運営している団体もある。これらの登録団体は、行政の下請け的存在である。スポーツ関係や日本語研修、その他分野を問わず広島を訪れる外国人を、一括ひと纏めにして面倒を見てくれる。このような組織は、行政にとって便利な存在である。

時間的にも経済的にもゆとりのある女性たちは、さまざまな国際交流事業に参加する。ボランティア活動は、社会から疎外されている主婦を吸引する。参加する形態は一様ではない。登録制度利用の参加がある。知人を介

広島県には多くの留学生が滞在する。一九九五年五月

して一度参加すると顔見知りになり、その繋がりでもた頼まれるという顔見知り拡散の参加がある。公民館に入りしているうちに頼まれてホームステイを引き受けることもある。彼女たちは権威に弱い。県や市という機関と親密であることは誇らしい。まして行政から頼まれる立場であることは自尊心の満足につながる。

また国際交流活動は「かっこうのよい」活動である。彼女たちは「外国人のお世話をする」国際的な活動を担っているという自負を持っている。留学生のホストファミリーになったり、ホームステイを引き受ける行為は「良いこと」や「やさしさ」で括られる。

行政はボランティア活動の女性たちを国際交流事業の下部に組織する。彼女たちは枠からはみ出すことはない。常に行政の指導通りに動く。従順な扱いやすい善意の人たちである。自尊心を上手に引き出す。彼女たちを量的にどれだけ掌握できるかが行政の力量となる。国際交流事業は計画通りに遂行できる。

## 二、「ボランティア活動」場面での問題

現在 七一七人である。そのうちの八九・一パーセントがアジアからの留学生である。

上記の公的機関では留学生等の交流促進と登録者の活動機会促進のためにさまざまな事業が実施されている。留学生にホストファミリーを紹介し、日本人家庭を訪問する機会を作ることなのである。

異文化接触。感謝される立場。外国人相手のボランティアは楽しい活動である。彼女たちはインタビュールに気持ちよく親切に答えてくれる。心優しい人たちである。「もう私長いこと関わってます。いろんな国の人をホームステイ受けてます。私は留学生だけじゃなくいろんな方、大学の先生とか国家公務員の方とか、三ヶ月くらい研修員でこられた方とか。皆さんとても人間対人間という接し方のできる方でした」[96:33]

### 五五歳

関心は、いろんな国の人と、どれだけ多く接しているかということに向けられる。つき合う人の国による差は「あまり感じない。あったかい発想持ってる人はどの国の人でもあったかいと感じる」[96:2,26 四三歳]し、「基本的にはやっぱり人間って共通だ」[96:3]9 六四歳」と思っている。「最初に受けた方は、あれはもう留学生ではないですよと言われるくらい立派な方」

「96.2.23 七二歳」で、友好的に楽しく交流している。

接触するのは殆ど留学生や公的機関などを介して広島を訪れる人々である。従って外国人労働者やイリーガルの人たちについては全く関心を持たない。「友達から聞くことはあるけど」[96.2.28 二八歳]、「イリーガルの人って見えない」[96.3.6 四一歳]し、「私の知っている人はそんなことしない人」[95.8.10 四六歳]である。聞き取りをした範囲で、彼らとの接触経験者は皆無であった。

情報としてはよく知っている。新聞・テレビなどの報道で外国人に関するものには敏感に反応する。通りすがりに見かける外国人とその情報を重ね合わせる。

「数年前からですよ。女性のね、水商売の方かなあという感じの方が結構いらっしゃる。スーパーなんかでよく見ますよね。テレビなんかの情報に影響されるかもわからないけど、フィリピンの方かなあという感じですよ」[96.4.4 四六歳]

そして関心は、「かわいそう」「哀れ」イメージに集約される。

「流川で逢ったんですけど、四く五人かたまっておられますよね、女の方が。この人たち夜のお仕事されるのかなあと思ってみましたけど。わりと悲劇が多い

じゃないですか。ああいうのを見るとかわいそうだなあ、そこまでしなくちゃいけないのかなあと思いますよ」[95.8.11 六三歳]

イリーガルの滞在者については、「ちゃんとした働いたお金貰ってるのかなあ」[96.2.26 四三歳]というくらいで、「特に思いというのはないけど、イリーガルで入ってきたら碌なことない」「同」と思っている。

彼女たちがつき合う外国人は、社会的地位や学歴のあるエリート層である。留学生たちも、公費私費の差はあったにしても、日常的に重大な人権侵害を受けることは少ない。

しかもボランティア活動は「あいている時間」に「できる範囲」でやればよい。それほど頑張らなくてもできる社会参加である。「ふだん着の国際交流」という言葉に象徴されるように、形式や決まりことは少ない。「お世話をしてあげる」感覚で、「やさしく」真心で接するのが理想とされる。「与える」日本人と「与えられる」外国人という関係が成立する。そしてその関係性でさまざまなドラマが展開する。

十年以上留学生のホストファミリーを続けている女性「七二歳」は、「日本人は親切すぎるって言うんですよ。外国人に言わせると、プレゼント魔。何でもあげりやい

いと思ってる。だからトラブルありました。表に出ないトラブルが」[96.2.26]と言っつ。

物をあげることで関係性を作る。やさしさの一つの形である。外国人とどのように接して良いのか分からないための窮余の策でもある。交流を勧める機関は細やかなオリエンテーションをしない。付き合いの中から個人が得ていくことしかない。問題が起きても解決方法が分からない。解決しないまま国際交流は継続する。トラブルの一つの例として、別の女性「五五歳」が次のように述べる。

「国際交流かぶれいとかね。ちょっと知りかけた時に舞い上がってしまった、留学生や外国人を自分の私有物化してしまっんですよね。ペット化してしまっ。顔黒いからとか言葉が違うからといって別に見世物じゃないんですからね。すばらしい人たちを振り回して、結局言うことを聞かなかつたら怒っちゃうとか、花火打ち上げる行事に連れ回して疲れさせるとかいろいろあるんですけど。結局は彼らは日本人嫌いになっ帰っちゃうんですよ。そういう人、何人も見てるんですよ」[96.3.31]

女性たちのやさしさは利他的である。長続きしない。面倒をみてやったら感謝をされなくなる。付き合いが深

くなるに従ってやさしさの代償として従順を要求する。上下の関係が成立する。結果として彼らは日本人との距離を取るようになる。

彼らが抱いていた広島の「国際」に対するイメージは潰れ去る。不幸にしてこのような経験をした留学生たちは、次の二つの道を選択する。一つは日本人との接触を拒否し同国人同士で助け合う道。もう一つは「上手に日本人を利用してる子もいますよ。選別して、このときはこの日本人、このときはお金持ちのこの人って」「同」という場面を提供する道。そのどちらも彼らにとって不本意な道である。しかしそれが「ここ」で生き抜く知恵である。

ひとたび問題が起こると日本人どうしは結束する。「上手に日本人を利用している子」に対する風当たりは強い。彼女たちは結束して排除する。そして従順で常に感謝を忘れない人だけを「いい子」として遇する。

留学生たちはその立場上、法的問題での差別を受けることは少ない。しかし、日常的な場で差別を感じている。友好的な人々の、やさしく装われる行為の内面に潜む差別を彼らは見ている。それは差別される側にしか見えない。

## 三、「結婚」場面での問題

広島で日本人と結婚するフィリピン女性が増えている。子どもが生まれ地域で生活基盤を築いている人も多い。が同時に文化の違い等による夫婦間の摩擦で離婚するケースも増えている。夫の暴力を逃れて家庭裁判所などに保護してもらおう女性もいる。

離婚は彼女たちにとって生活権にかかわる深刻な問題である。彼女たちは、日本人の配偶者ということでビザを得ているため、離婚するとビザ更新ができない。日本で生活したい場合には、別途定住者ビザの申請をしなければならぬ。出入国管理局と交渉を繰り返す。あるいは状況によっては裁判で勝ち取らなければ日本在住はできない。法的排外によって生存権を脅かされる。

外国人との結婚は、日常の生活場面でのより具体的に富んだ異文化接触である。言語や立居振る舞い、食物、家族との関係性の取り方など想像を越えた異質性が凌ぎ合う。日本人男性と結婚するフィリピンの女性たちは、夫に日本への同化を強要される。夫だけでなく夫の親族、職場や近所で関わる人にも「日本人と同じように」行動することを無言のうちに強いられる。

言葉が通じないことや生活習慣の違いは、はじめから

覚悟している。それらはお互いの歩み寄りで何とか克服できることである。しかし、一方的に日本への同化だけを強いられるのは我慢できない。「日本人になれ」は「フィリピン人ではいけない」ことであり、彼女たちの人格を否定することだからである。

フィリピン女性のFさん〔二十七歳〕<sup>5)</sup>は言う。「日本人の旦那さんと一緒の人、幸せでない人のほうが多い。入管の問題とか文化の問題とか私たち全て日本人に合わせないといけない」〔96:4:26〕

結婚生活が破綻する理由はお互いの関係性で異なるが、殆どの場合男性側の無理解による。日本人男性は「フィリピン人と結婚したからといってタガログ語を勉強したりとかフィリピンの生活習慣を勉強したりする人は少ない」〔96:4:25 弁護士 三七歳〕<sup>6)</sup>日本の男性がよく言うことは「とにかく日本で今住んでいるんだから、あなたは日本に来たんだから一〇〇パーセント日本に合わせなさい」〔同〕である。

彼女たちは離婚するとビザ更新が難しい立場にある。男性たちはそれを利用する。日本とフィリピンの文化の違いを理解することなく、日本への同化を強いることで解決しようとする。妻を「ともに生きる」相手として見ない。「フィリピン人」と「女性」への二重の差別であ

る。

Fさんは「まじめな日本人の男性といたら日本人の女性に行きますね。で、フィリピンの女性には、悪い、ほんとに情けない男ですね。これも差別ですね。」と言う。

妻子ある男性に騙されて子どもを生む女性も多い。Aさん「三三歳」は、妻子のある男性の子どもを生んだ。男性は離婚して彼女と新しい生活を始めると約束した。しかし約束は守られず、子どもと共に退去強制処分を受けている。

日本の国籍法は、法的婚姻関係にない外国人との間に生まれた子に日本国籍を与えない。彼女は日本で子どもを育てたいと思っている。そのために子どもの日本国籍を取得するべく「国籍確認訴訟」を起こし、広島地方裁判所で係争中である。

国籍法二条一号において、外国人女性と日本人男性との間に生まれた非嫡出子については、男性が子の出生前に認知をしなければ日本国籍は認めないと定められている。法的な除外が厳然としてある。日本の国籍法は子どもの人権よりも優先される。

一方、日本男性の問題が浮き彫りになる。Aさんが仮に日本人であったならば。男性は妻かAさんのどちらか

を選択したはずである。Aさんがフィリピン人であるが故の差別的行為であり、かつまたこのような状況が、我々の社会で問題認識されていないことが、Aさんと同じケースを次々と生み出している。

結婚して家庭を築き平和に生活しているカップルも多い。離婚の原因を個々の資質の問題と規定する人は多い。しかし、個々の資質や人間性だけで括ることはできない。日本人男性の結婚認識の問題である。夫と妻のありようは日本人同士の男女関係によって見ることができよう。

へある場面で

女性「四二歳」へのインタビュアーの場に、夫「四九歳」が同席した。インタビュアーは女性の正面に座り、彼女と向かい合う。夫は妻の横に座る。質問をすると女性はチラッと夫の顔を見る。すかさず夫が意見を述べる。妻が話しはじめると夫がささげる。そのスタイルで三分経過する。「慰安婦問題について、これは女性の意見を聞きたいのですが」と男性を牽制すると、彼はにやりと笑う。

ようやく女性は夫にあいずちを求める形で言葉を発する。「そうですね……、なんだろう……。それこそ、意見を持ってないと言われそうな……。」と口ごもる。再び

男性が意見を述べ始める。最後に男女の家庭での位置関係について質問する。「私はこの人を尊敬してますし、私たちは対等です。理解しあっていますし。私はこうしてお茶も入れるし家事も手伝います」と男性が言う（確かにお茶を入れてくれた）。妻は「私たちは何でも言い合えるし、いつも一緒に居るから考えは全く同じなんです」と言う。[96:3:41]。

女性の話は殆ど聞けないインタビューになった。一生懸命考えながら話そうとする妻をさえぎる。こういう場面は日常的にどこでも見られる。これが日本の夫婦の位置関係である。

男性は夫婦が対等な関係であることが望ましいという認識を持つ。現代の風潮に合わせる術を知っている。対等を装う。しかし態度は従属関係そのものである。

女性は夫婦の意見が常に同じであることを良いことだと思っている。これも妻の主体喪失である。妻は、それが夫婦関係を平穩に保つ唯一の方法であることを知っている。従属関係は双方の深層に息づく。表と裏の使い分け。男性も女性もそれを上手に演じて見せる。その内面は、文化を共有する人にしか見えない。

カソリック教の影響が強いフィリピンでは、神の前で

男女は平等である。女性は一人の人間としての権利を保証される。従順な女性が範とされる日本の社会規範とは相容れない。

日本文化の内面を、彼女たちが理解できないのは当然である。フィリピンの女性たちは結婚して初めて日本人の「結婚認識」と向き合う。夫の内面を理解できぬまま離婚に踏み切る女性も多い。

Jさん「二六歳」は、最近離婚した。子ども二人は自分が引き取り保育園にあずけて働きながら育てている。今は三人で平和に暮らしている。「わからんのよねえ。一緒に住まんと性格わからんのよねえ。夫婦でわからんことあるのよねえ。難しいのよねえ」[96:4:25] と言う。結婚生活の厳しさが想像できる。

#### 四、女性の自己認識と外国人排除

女性の結婚観にも同じ文化の中で培われた男女関係のありようがある。夫と類似性をもつ。夫に従うことが当たり前だという認識である。従属関係が結婚の規範になる。男性に従わない妻を認めない。従って男性を肯定する方向に進み、フィリン女性の問題を同じ女性として



共有できない。

外国人に好意をもって接している女性たち。国際的なボランティア活動を積極的に行う女性たちも、家族が外国人と結婚することには消極的である。

「結婚は同じ日本人どうしでも難しい」[96.4.9] 五〇歳「本人どうしが好きになってしまったらもうどうしようもないが、できたら避けたい」[96.4.4] 四六歳」と思っている。結婚賛成派は既に孫のいる年齢層だけであった。

自分の息子が外国人と結婚するのは、「やっぱり考えてしまうでしょうね。外国人のお嫁さんでも本当に日本人になろうと思って努力する人はいいんですけど、そうでない人はねえ」[95.10.26] 四八歳」という同化強要思考である。

子の結婚に関しては、夫との関係が内在する。「私は良いと思って主人は絶対許さない」[95.8.10] 四六歳」ことを承知している。夫と諍いを起こすことは避けたい。結婚は一家の重大事である。子の主体的選択にも夫の決定にも妻の介入する余地はない。その狭間で右往左往する。

女性は大事の決定の場において、多くは「従」の立場に甘んじる。男女関係と上下関係の複雑に交差する関係

の中で、女性は自己の確立を余儀なくされる。

（ある場面で）

韓国女性Kさん「三二歳」は、日本人と結婚して広島に住んで六年になる。近所に住む日本人女性に「あなたは外国人だから、解らないことがあったら教えてあげましょう。何でも聞いてください」と親切に言われる。

「その人が言うんですよ。あなたは韓国人だと言わない方がいいって。私も最初はわからなかったぐらいだから、日本人だと言っても分からないから日本人だと言いなさいって。でも、話しているとお国はどこですかとか、お里はどこですかとよく聞かれるんですよね。そしたらその時は九州だと言いなさって、その人言うんです」[96.7.9]

Kさんは、日本に来た当初は怖いものは何もなかった。しかし、最近是人が怖いと思う。

「特に近所の人たちが怖いです」と言う。

女性は、社会でも家庭でも常に周辺に位置する。そこで自己を確認する。「従」の立場に甘んじている。それゆえに中心移行の願望は強い。彼女たちは、外国人女性を周辺に追いやることで心理的に中心に移行する。

「親切」を自己表現しながら「他人」の姿を借りて「排除」は巧妙に演出される。決して正面からは向かわない。諍い避ける術を知っている。常に経験させられたことだからである。「親切」の衣を着せることによって、自分分は傷つかずに思いを遂げる。また、他人の姿を借りることに比べて多数者の存在を示そうとする。これも経験した。相手への圧力が増幅されることも計算済みである。

Kさんの近所に住む女性は、ごく普通の生活者であり平均的市民である。このような現象は日常性の中で起こる。Kさんは、わが子が日本社会で今後受けるであろうさまざまな差別の場面を予感している。故に怒りと悩みが交差する。

女性の自己認識は複雑に表出する。男女の関係で支配される女性は「日本人」と「外国人」との関係で絶対的支配者となる。異質性排除は情け容赦なく行う。ここで日本人認識は自己陶醉型の優越意識となる。

聞き取り調査では日本人としての優越意識が顕著にみられた。〈軍隊慰安婦問題について〉ある女性「四六歳は「いちばん表に出しにくい面と思うのね。そのところを触れる事じたいがね、日本人にはできにくい。例えばレイプされてもよう言わないでしょ日本人は」

[95.8.10]と述べる。また〈原爆を落とした国とし

てのアメリカに対して〉ある女性「四一歳」は「日本人はされても自分たちの中で消化して、恨むっていうことをしない国民性、穏やかな国民性だから」[96.3.6]と答えている。

これに類似する表現は、聞き取り調査で殆どの人に観られた。外国人との差異を日本人美化で語る。それは、国際交流活動にかかわる女性たちのみならず多くの日本人の精神世界に内在する。

### むすび

「国際」という文字があらゆる場で頻繁に見られる広島である。国際化とは何かを問いなおしている人々もいる。しかし、外国人に対する排他性は日常的な場面で根深くあり、より見えない形に変質している。

ここにあげた例は、ごく一部にすぎないかも知れない。けれども現実には「ここ」で起こった出来事である。「結婚」の生活場面で起こる日本への同化の強要は、自国の文化を誇りに思っている人々の人権の侵害である。暴力や離婚の問題も人権侵害の結果として起こる。フィリピン女性たちはやむにやまれぬ気持ちで組織を作り闘っている。Kさんもわが子のために闘わなければならないと思っている。

彼女たちの感性は日本人と接して磨かれる。そしてよりクリアーに日本人を描き出す。異文化接触の場面に写し出される日本人は、「国際化」において一步も二歩も遅れている。色あせてみえる。

このような状況を作り出したのは、ボランティア活動の権威による統括であり、それに与する人の社会観である。ボランティア活動が権威によって統括組織されるとき人々の自発的意欲は疎外される。ボランティア精神は衰退する。

今後さらに増すであろう外国人。地域の住人となり生涯「ここ」で生きる人もいるだろう。結婚して子どもを学校に通わせる。子どもが成長し就職し結婚して新しい家庭を築く。共生は必然的である。「日本人」「外国人」のカテゴリーで括る時代は過ぎ去る。

国際交流活動は個々の場に戻される。それぞれの生活圏で我々が個々の事例にどれだけ多く耳を傾げるか。どれだけ学ぶことができるか。そこから始まる。ボランティア精神はここで再度問われる。

〔注〕

〔1〕 広島県企画振興部調査

〔2〕 広島県観光課調査

〔3〕 〔4〕 広島国際交流課発行「国際化関係資料・一九九五年」

〔5〕 福山市在住。二年前にフィリピン女性たちの組織「FFO」を結成。結婚・離婚問題で相談を引き受ける。ビザの問題で入管との交渉も多い。女性たちの自立に向けて活動している。

〔6〕 フィリピン女性の離婚問題で裁判の弁護を引き受けることが多い。多くの事例経験者である。

